地球から核兵器をなくそう

大水害惨禍の中で
反核・平和の誓い

長崎大会

一分会（四山）　左藤臣芳

〈八月七日〉

午後一時過ぎ、荒尾地評に集合した代表団（武島会長ほか九人）は、直ちに長洲港で熊本県代表団（柴田団長ほか九十人）と合流、貸切バス三台で長崎市に向った。

長崎も暑い。車中から見え隠れする七・二三大水害の爪跡（死者二百八十七人、行方不明者二十四人）は生々しく、浦上から市内に入ると、さらにその症状はひどかった。とくに出島から中島川沿線の民家・商店街の一部では、今だにガラクタが放り出され、壊れた軒先きがむき出しになっている。それに輪をかけた道路を掘りおこすハンマーの音。復旧は今からである。

しかし、駅前から中央橋周辺の観光通りは車の放列で、観光バス、タクシー、路面電車がひしめき合って人、人、人――、さすがに観光長崎のしたたかさを感じた。思案橋手前の浜の町から歩いて五分の〝白雲荘ホテル（宿泊地）〟も三十分以上かかってやっとたどりつくありさまだった。

「……ともかく被爆三十七周年原水禁大会が、予定通りひらかれることは意義が深い。必ず成功させねばならない」。福島事務局長が夕食前に説明した意味が、実感として伝わってくる。

〈八月八日〉

午前九時から午後四時まで、長崎市に結集した全国六千人の代表団が、市内十四カ所の会場で、四つの分科会、三つの分散会、三つの討論集会で真剣な交流を行なった。私は勤労福祉会館の第二分散会（四百人）に出席した。会場はキャラバン隊など若者たちが多く早口でしゃべる意見発表には、何かついていけないズレを感じた。

また、世界大会「長崎のひろば」は、会場がせまい公会堂に変更されたので、熊本県割当ては三十五人に縮小され、各地区労から一人ずつこれに参加した。

〈八月九日〉

「水！
水をください！
熔けていく火の塊りです
一すくいの水をくれませんか
命の糸をつなぎとめて下さい誰か！
物みながどろどろに崩れていく
街の底で
はいまわる修羅は
頬の肉たらしたまま
水！
水をください！」

――長崎のキノコ雲を見た私の生涯のために――としてつづった松永伍一氏の詩の即読で始まった「閉会総会」は、予定会場の国際体育館が使用できず、県営グランド横の広場で午前十時から開かれた。鈴木総理が参拝にくる平和公園での物々しい警戒の式典会場と違い、あけっ広げた炎天下の会場だった。

十数人の外国代表団を始め、各民主団体、組合、政党、被爆者、学生ら六千人を代表してそれぞれあいさつ、意見発表があり、一年間の闘いの総括が行われた。ともかく、うだる暑さだ。木かげはなし、時間の経過とともに皆んなぐったりしている。動きのよかったのは、アイスクリーム売りのおばさんたちだけだった。そして運命の午前十一時二分、全市一斉にサイレン、鐘が鳴りわたり、われわれも「ノーモア長崎」平和を願って心から黙とうを捧げた。

こうして午前十二時前、反核運動をさらに拡大する「大会宣言」十六項目の国際連帯宣言、七項目の行動決議案、「むつ」廃船決議案をそれぞれ満場一致で採択し、閉会総会は成功のうちに終った。

すべての核に反対
今からでも遅くない

広島大会

一分会（四山）　森のぼる

例年になく、反核の動きが世界的に巻き起こる時、八月四～六日原水禁広島大会が開かれた。一瞬にして死者の山を築いたあの日と同じように、うだるような猛暑の広島であった。

今、平和を願う世界の人々の願いに逆行するかのように、地球の人類、生物のすべてを殺しても、なおあまりある核兵器が、われわれの住む地球に存在している。いや、そればかりでない。省エネという美名のもとに、われわれの住むすぐ近くで、原発の建設が強行されている。

殺人兵器のみなもととなるプルトニュームがゴロゴロとつくられている事実、反核をせまい意味での問題点（核兵器）にとどめてしまえば大変な問題が横行しているのである。

私は、こんどの広島大会で感じた点がいくつかある。

その第一は、反核とは、いかなる核にも反対をするということである。

今回の大会のメインテーマに、〝生きる〟という言葉がある。人間が主人公であるこの世界の中で、人間が「生きる」ということを叫ばねばならぬほど、われわれの周囲の人間にとって最も危機的な状況がひたひたと流れているのである。なんと恐ろしいことだろう。

その二は、いかなる国のいかなる核にも妥協なしということである。反核運動に条件闘争はない。これまで主張してきた「いかなる国の……」の正しさを自認した感じである。

その三は、平和とは反戦に向けての闘争そのものであるということである。じっとしていては平和は守れぬというきびしさが身のまわりを包んでいる。自らできる反戦のたたかい、平和を継続させるたたかいを自覚しなければならない。例えば、教科書問題がいまテレビや新聞をにぎわしているが、外国から指摘をうける前に、日本人自らが問題にしなければならなかったし、自己批判させられる。

戦争を知らない子供たちに、戦争を知らせない策動が日々強められている。戦争が悲惨だからとなぜ事実をかくすのだろうか。聞くこと、見ることをとうしてしか教育する機会しが持たぬ子供たちに、私たち（大人たち）は戦争のみにくさ、悲惨さを知らせてもらえない子供にしてしまってはいないだろうか。

私は家庭の中から、まず反戦のたたかいを再構築していかなければならない時にきていることを知らされた気がする。

東京三多摩の子供たちの大会への参加や、近畿地区全電通青年部のキャラバン隊活動など、平和を守るための積極的なたたかいに学び、単に「核」に反対する立場を一歩進め、今なにをなすべきか、なにができるのかを真剣に考える時にきていると思う。いま直接的に反核闘争に立ち上がっている。それが無数に増えている。労働組合が、私たち自身が反核の具体的な運動と連帯してたたかうのは、今からでもおそくないのだとしみじみ感じた広島大会への参加だった。

囲碁愛好会が秋季大会

三池労組の囲碁愛好会では、秋の囲碁大会を計画致しました。

日時　九月五日　午前九時開会
場所　組合事務所会議室

会では、多くの皆さんのご参会を呼びかけています。

一往会展が

目下勉強中のメンバーが八月三十一日まで、井筒屋ギャラリーで開きました。十分会の宮脇好光さんも出品しました。

強制労働の犠牲
死没囚人労働者の法要
14回目、保存会が

大牟田囚人墓地保存会（浦川守代表）では、八月十日午前十時から大牟田市久保田町一丁目の運心寺（運池西乗住職）で、第十四回目の死没囚人労働者の法要を行ないましたが、約四十人の参詣が集い、苛酷な強制労働の犠牲となった故人の冥福を祈りました。

囚人墓地保存会は、囚人墓地や三池炭鉱における囚人労働の歴史を語り伝える史跡などを保存する運動に取り組んですでに十五年余りになります。

三池炭鉱の囚人労働は、明治六年から昭和五年の廃止まで五十七年間にわたって続けられましたが、その期間が長かったことと、投入人員が多かったことは他に例を見ません。

「苛酷な労働に、妻子や親のある一般の労働者を使えば、賃金が高くつき、死にでもすれば面倒だ。囚人を使えば低賃金ですみ、死んでもさして問題もなく、加えて国家経倫の道にもそう一挙両得の策」という、維新政府と資本の姿勢が典型的にあらわれているのが囚人労働であり、またその苦役は記録の上だけでも残酷、残虐さがうかがわれます。

次の短歌は、法要の中で朗読により献歌されたものです。

岩本宗三郎

坑内と獄舎をゆききするのみに
果てし一期の墓小さなる
石粗く削れる墓標獄囚の
番号のほか何もしるさず
おぼおぼと囚人墓地にしるす文字
袷番号といひ否といふ
囚人は繋がれしまま炭掘りき
かく簡素なる境となるまで
何欲りて息は絶えけむ囚人の
境それぞれに傾ける影

木村　守

殺りくの限りか資本攻勢の
ゆきて詰まる日憎々く見つ
不浄物洗いて強き雨の礼
いま緑陰に奏でいるせみ

釣りキチ余談

連載第十二回

人命救助の巻

十一分会（三川）　石田鈍竿

日本労働運動史上最大の闘いである三池闘争が藤林あっせんによって、事実上終りをつげた翌三十六年の秋。釣り友だちのTちゃんを誘って、荒尾の砂浜へグチの夜釣りに出かけた。

その週は、一番方なので早めに切り上げたが、釣果は二人で十五、六匹だった。仲良く分けて、さあ帰ろうかと、堤防の道路を雑談しながら、自転車のペダルを踏んでいた。

途中、堤防に若い娘さんが海の方を向いて座っていたが、自転車のライトに照らされ、横を向いて光を避けた。まだ幼なさの抜けきらない顔立ちで、十七八ぐらいに見えた。

『夜の夜中に、早よう帰らんと危なかばい』と声をかけて通り過ぎたが――涼みには季節からみて遅いし、デートかな、もってこいの場所だけんな。しかし、何だか様子がおかしかぞお――

しばらく走ったが、何だか気がかりである。

『Tちゃん』

『石さん、さっきの娘は何かおかしかのオ、胸騒ぎのするばん』

Uターンしてみたが、もうそこには娘さんの姿はなかった。

『帰ったつばい、心配性はでけんのオ』

お互いに大笑いして、ふと海の方を見ると、波打ち際から五六メートル先のところが白く波立ち、沖の方へ何かが移動しているように見えた。

ハッとなり、反射的に二人は自転車を放り出し、砂浜へ全力で駆け下りた。やっぱりそうだった。

さっきの娘が、放心したように肩を落とし、うつ向いて沖へ進んでいるのがはっきりと見えた。

服を脱ぐ暇もなく、そのまま潮の中へ駆け込みはしたものの気持ばかりが焦って身体は進まない。やっと追いつき、同時に平手で力一杯〝バチバチ〟と思いきりたたいた。

ボケーッと放心した顔が、目をまん丸にした表情にかわり、やがて崩れ、ワーッと大声を出し俺にしがみつき、しぼるような泣き声に変わっていった。

二人で引きずるようにして砂浜へ連れて行き、事情を聞こうとするが、娘さんはウンともスンとも口を効かない。Tちゃんの、人情味あふれる優しい説諭が功を奏して、高校生同志の失恋からということがわかった。

『帰らない』という娘さんをやっと納得させて、ずぶ濡れのまま家に送り、びっくりする両親によく話をして外に出た。

自転車に乗り、ペダルを踏みながら〝エークション〟。背中がゾクーッとして、身体がブルブル震え出した。

『寒かのオ……』

Tちゃんは、あくる日から二三日風邪で会社を休んでしまった。

あれから、娘さんは苦しみから立ち直り、幸せに暮らしているとだろう。